

## 神戸大学での研究の歩み

浅野慎一

最終講義：<https://www.youtube.com/watch?v=5eo2KONKMiM> の「研究」部分を素材に。かなり補充。

1992年10月1日、北海道大学→神戸大学。

「『発達科学部』という新しい学部ができる。来ないか？」

「行きたい！ 『人間発達の社会学』を作りたい」

以来、29年＋半年。

## I. 前史：北大時代（1980年代～1992年）の研究

## ①秋田県の出稼農民の調査研究

都市と農村、労働者と農民、地域間・階級間移動に伴う主体形成（人間発達）と社会変革。

\* 個々人へのインテンシヴなインタビュー調査。

生活過程分析にもとづく社会変動論。地域社会学：鈴木栄太郎⇒布施鉄治(恩師)。

ミルズ「社会学的想像力」

「一人の人間の生活と、一つの社会の歴史とは、両者をともに理解することなしには、そのどちらの一つも理解することができない」

マルクス・エンゲルス「生活過程論」

「唯物論的歴史観によれば歴史において最終的に規定的な要因は現実生活の生産と再生産である。…もしまだこれがこれを歪曲して、経済的要因が唯一の規定的なものであるとするならば、さきの命題を中身の無い、抽象的な、ばかげた空文句にかえることになる」「ブロッホへの手紙」

「社会的編成と国家は、いつでも特定の諸個人の生活過程から生じる」「ドイツ・イデオロギー」

BUT 「村社会・身近な社会関係」の変化は見えても、「日本社会」変革の論理・展望は見えず悩む。

## ②労働者（炭鉱・自動車・縫製・食品加工等）の調査研究。

労働－生活を通じた主体形成と社会変革。

「職場社会・身近な社会関係」の変化は見えても、「日本社会」変革の論理・展望は見えず。

BUT 気づいたこと：日本の労働者＝多くが「出稼類似体験」（農村出身→都市就労）。

⇒ 労働者の労働や生活、社会関係や意識に多大な影響。

∴ 戦後高度経済成長期の「労働力流動化政策」（農村→都市）。

欧米：既に1950年代の高度経済成長期から、多国籍企業化・移民労働者受入。

日本：一国内の労働力流動化（移民受け入れず）、低賃金労働力を確保、輸出主導型高度経済成長を遂げた、当時としては唯一の「先進」国。

（後に東アジア諸国が続く）

＝戦後日本社会の個性：日本型企业社会、日本型家族・性別分業、  
管理主義・競争主義教育、過疎過密・公害、  
「単一民族神話」、同調圧力etc.

& 1980年代末、輸出主導型の資本蓄積構造は限界。

多国籍企業化・外国人労働者受け入れが開始。

戦後日本社会の根底的な変動・変革が進展。

「日本社会」変革の論理が見えなかったのは、「一国単位の変革」しか想定していなかったから！

\* 「一国単位の変革」とは？

諸個人の労働・生活の論理⇒労働組合・地方自治体・市民運動等に定着⇒機構化⇒国民国家(立法・行政・司法等)の変更によって問題解決⇒「国際」社会(≠世界社会)に波及。

こうした認識の枠組こそ、戦後日本の「単一民族神話」への呪縛。

(=社会変革の論理はグローバルな視野の中でこそ。日本社会の一国単位の変革はありえない！)

→1) マルクスのアイルランド人出稼ぎ・移民問題、レーニンの出稼ぎ農民・農村共同体論。  
一国単位→世界資本主義。自説を転換。直観は確信に。

\*マルクス：『資本論』⇒1867年以降のアイルランド問題・ロシア問題等。

レーニン：『ロシアにおける資本主義の発展』⇒「二つの道」⇒1916年『帝国主義論』

2) 外国人技能実習生（研修生）、日本語学校生（就学生）の調査に着手。それなりの「手応え」。  
「国際的・地域的移動に伴う人間発達・社会変革」を研究：  
「新たに発足する発達科学部にピッタリでは？」と（青天の霹靂の）お声がけ。

## II. 神戸大学（1992年～）での研究：5つの柱

### ①多様な移民・外国人労働者の調査研究

技能実習生、日本語学校生（就学生）、留学生、華僑、日系ブラジル人、ベトナム難民etc.

「移動・労働・生活を通じた人間発達→グローバルな社会変革に多様な形で連鎖」を実感。  
やはり「日本」という一国単位の社会変革路線への視野狭窄が桎梏！。一層、確信に。

& I. ウォーラーステインの世界システム論を知る。何度もゼミ。一層、確信が補強。

### ②戦後日本の社会構造・変動論（単一民族神話・輸出主導型経済成長）

= 世界資本主義システム内での日本の相対的位置に由来。（≠日本国内の一国的要因）

戦後日本の左派・右派双方のナショナリズムの問題性・限界。

\*特に左派：国民春闘、国民教育、国民福祉等を肯定的に評価。多国籍企業・移民活用を前提として

「自国民」に提供される欧州の良好な労働条件・教育・福祉・男女平等・市民社会等を「お手本」視。（=日本も欧米のように世界資本主義システムの中核になろう！）

& 東アジア社会の特徴・社会構造変動論（日本の後を追い、労働力流動化、輸出主導型高度経済成長・「世界の工場」。欧米との差）。特に中国・日中関係。

\*ウォーラーステイン：東アジアは、「反国家主義の波がまだ到達していない唯一の地域」「一国単位の発展への幻滅が生じていない唯一の地域」、「だから共産主義(国家)も維持」。

### ③∴ 真の社会変革=世界資本主義システムそれ自体の超克（脱近代）。

（≠世界資本主義システム内部での「成功した周辺」から「準中核」への上昇移動）

そのためには、近代社会で最後まで維持される3つの差別・分断の境界線・「壁」を克服する必要。

1) 国籍（主権）、2) 階級、3) 能力（メリトクラシー）。

\*資本主義的階級の正統性：国籍（中核諸国の国民福祉）と能力主義（階級間移動の可能性）によって担保。

移民・外国人労働者の調査研究（～2000年）：1) 国籍、2) 階級の「壁」の批判的な越え方は把握可能。

BUT 「能力」の壁の越え方は不可視。∴ 移民・外国人労働者：高い「能力」の保持者。

④∴ 3つの最終的な壁を越えようとしている典型的主体は？（著書・論文は2006年、調査は2000年頃～）  
研究対象をシフト。

中国残留日本人（能力ではなく、血統で国境・国籍・階級を批判してきた人々）、

夜間中学生（無国籍を含む多国籍、能力主義・メリトクラシー・階級の被害者）

### ⑤主体形成（人間発達）を、俯瞰的・根底的（ラディカル）に捉えるための方法論・認知枠。

発達科学、人間発達環境学、人間環境学。自然と社会（「主体形成・能力」、「生命－生活（阪神・淡路大震災）」観、社会構築主義批判、エコロジー、ポスト・ヒトゲノム等）

人間が生きるために必要な協働関係としての脱領域的・グローバルな「地域社会」。

= 「生活圏」としての地域社会。（地域社会学会）。

共同所有を前提とするコモンズよりもっと柔軟・融通無碍。生活課題とその解決。

国家・自治体よりむしろ、地域社会！

= 「ポストコロニアルのサバルタン研究」（ギルロイ、チャタジー等）を知る。何度か、ゼミ。

模索は、あまり的外れではなかったと確信。

\*ポスト・コロニアリズムについて

日本ではしばしば戦争・植民地支配の残滓・「記憶」の問題として議論。

BUT 重要なことは国民民主権・民族解放という「正義」の批判的克服。左右のナショナリズムの批判。

帝国主義・植民地支配の時代には国民民主権・民族解放が「正義」。

BUT 1960年代末、それが達成されて人類は幸福になったのか？

地球環境破壊、貧困・難民、戦争・テロ、いじめ・過労死

むしろ国民民主権・民族解放を達成した国民国家こそ人間の生活の阻害要因という側面も。

では、どんな社会を構想するのか？ =ポスト・コロニアリズムの課題。

\*ギルロイ:ブラック・アトランティック。やや文化論に傾斜。もっと生活過程論に引き寄せて。

チャタジー:市民社会とは「それぞれのコミュニティにおける広範な民衆の生活からは隔絶し、市民的自由や合理的な法律で守られた居留地の中に閉じこもった、近代エリート集団の閉鎖的な連帯関係」。

∴ 「政治社会」が重要。やや運動論に傾斜。もっと生活過程論に引き寄せて。

マルクスの国民民主権・市民社会批判(国家と社会の分離。ユダヤ人問題によせて)。市民社会とは「人間を類としてむすびつけるあらゆる紐帯をひきさき、…互いに敵対しあうアトム的な個人の世界に解消する」ための機構。「人権」はそのような市民の利己的権利。

& 先端科学技術(ヒトゲノム介入、AI、サイボーグ化etc.)のもつ「生産力=破壊力」のもつ意味。

人類の終焉、ポスト・ホモサピエンス化という「もう一つの未来」の可能性。

\*核戦争・地球環境破壊：先端科学技術が生み出した「絶対悪」「人類絶滅の危機」。人権概念で容易に批判。

BUT ヒトゲノム介入・サイボーグ化による身体改造、AIによる社会統制：賛否の合意困難。

少なくとも「人権概念」からの批判は不可能。& 不可避的進展。

「人類絶滅」ではなく、「ポスト・ホモサピエンス化」の是非。

マルクスの「類的本質」概念を、人類はついに克服か？

自然と社会／主観と客観／主体と環境等の二分法の克服 & 自然本質主義の存在を前提

として社会構築主義を賛美することにとどまる認知枠(they and us、ジェンダー・「社会モデル」等)に対するラディカルな批判上も重要なテーマ。

表1 著書・論文数(概数)

		出稼ぎ 農民	労働者・ 階級構造	移民・ 外国人 労働者	国民国家 東アジア 日本社会	人間発達 環境	中国残留 日本人	夜間 中学生	地域 その他
北大	1982~1992年	<u>6</u>	<u>1 2</u>	3	—	—	—	—	—
神大	1992~2005年	1	—	<u>2 5</u>	<u>6</u>	<u>1 2</u>	—	—	<u>4</u>
	2006~2012年	1	2	6	2	4	<u>1 9</u>	1	<u>2</u>
	2013~2022年	—	—	—	1	4	<u>1 0</u>	<u>7</u>	<u>5</u>

III. 神戸大学での研究の自己評価

研究：元々の資質・能力の欠如。 ×：頭脳明晰・博覧強記・語学堪能。

BUT それとの比較では、5~10倍の研究業績。

∴ 多くの人々に支えられたお陰(=ここ1年位の本音)

- ①マルクス、②布施鉄治(恩師)+大学院時代の先輩・仲間、
- ③発達科学部・社会環境論の同僚(後に詳述)、④学生・院生(広義の共同研究者)、
- ⑤共同研究者(技能実習生・残留日本人問題=修岩、夜間中学=草京子)、
- ⑥調査対象者(インタビューだけで1000人位)

\*発達科学部、とりわけ社会環境論の同僚。

1)広義の「社会変革の立場・問題意識」を共有。(≠特定の政治的・思想的立場)

=既存アカデミズム・近代諸科学を前提とした知的イノベーションに満足せず、ラディカルな知的リボリューションを志向。

= 「通常科学 (クーン) 」の枠内での地位・業績の達成ではなく、より根底的なパラダイム転換。  
(実際にパラダイム転換の能力が有るか無いかは、別問題)。

知的パラダイム転換には、既存のアカデミズムを構築している現実の「社会変革」が不可欠。  
= 自らの競争的業績のためではない、たとえ業績としては全く評価されなくても、世のため人のために必要な研究を！。

2) 狭義の「社会学」 (=近代諸科学・専門性) に縛られない「社会環境論」。

「社会学」: 比較的、自由度の高いディシプリン。(社会学者はしばしば強調。変動期の社会科学)  
BUT 近代社会の中で、経済学・法学・政治学等と区分された近代諸科学・「通常科学」としての「社会学」も成立。= 視野・方法の近代主義的な制約・限界。

*\*近代社会を前提とした諸科学:*

*国民国家(政治学・法学) + 資本主義(経済学) + 市民社会(社会学)*

*その必然的成立過程(歴史学)、それを担う主体とその形成(心理学・教育学)*

*「未開」・未包摂(人類学・東洋学)etc.*

「社会学」: 経済学・政治学と並び立つ近代的な専門性?、

or 経済・政治・歴史・教育・心理等を含む「社会の学」?、

浅野: 元々、後者の立場。BUT 社会環境論=それを一層、促進、確信に。

「(狭義の)社会学」から脱皮しなければ、主体形成-社会変革の道筋は見えない。

1) 変革の立場、2) (狭義の)社会学からの逸脱=逆に社会学界でのオリジナリティの発揮・評価にも連鎖。

\* 人間環境学科・発達科学部での共同研究も、多様な知的刺激・視野の拡大。

*人間環境学科: 自然と社会: エコロジー、ポスト・ヒトゲノム、安全指標等。*

*発達科学部: 主体形成、身体論・心理学・教育学。*

BUT 浅野の在籍中: 「学際」研究(「通常科学」としてのそれぞれの専門性を尊重した上で、それらを複合・分業する近代諸科学)の域を出ることは困難。= 浅野の力量不足。

#### IV. 今後の「展望(夢)」(おそらく偶然の出会いでどんどん変わるが、現時点で…)

1) 残留日本人研究の総括。書籍刊行。(既発表のデータは約3割。約7割が未発表)

2) 夜間中学に関する史料集刊行。

全国夜間中学校研究会の創立70周年記念事業、2024年の刊行を目指す。

鋭意、作業中だが前途遼遠。

3) マルクス研究。もう一度、『全集』を読む。自分なりの総括。

\* そのために唯物論研究協会に入れてもらったが…前途ますます遼遠。

目標: ポストコロニアルの多様なサバルタンによる脱領域的でグローバルな協働(地域社会)の形成で、人類は近代(国籍、階級、能力の壁)を克服できるのか?

vs 先端科学技術(ヒトゲノム操作、AI等)により、近代(国籍、階級、能力の壁)が飛躍的に強化され、結果的に人類は滅亡(ポスト・ホモサピエンスへの「進化」)の道を主体的に選ぶのか?

当面、この同時進行。 or 第三の道はあり得るのか? を見定める。

多謝!!!。